

念仏の人 木村無相

—— 妙好人の一考察 ——

大 屋 憲 一

この論を書くにあたり、私は、先ず「妙好人」なる言葉の受け取り方について、若干の考察をしておきたい。

妙好人とは、仏教、殊に、お念仏の中にその日暮しをす
る篤信の念仏者を指すが、その典拠を示せば、『観無量寿
經』には「若念仏者、當レ知、此人是人中分陀利華」とあ
り、善導大師は、又、これを受けて「若能相續念仏者、
此人甚為_ス希有_{ナリト}、更無_ニ物可_ニ以_テ方_ヲ」之、故引_テ三分陀利_ヲ為_レ
喩_一（観無量寿經疏）と積されている。ここに云う芬陀利華
（Pundarika）とは、白蓮華の謂であつて、「高原の陸地に蓮
を生ぜず、卑湿淤泥に蓮華を生ず」とあるように、泥中の
濁りに染まず、清浄な華を開く蓮の中でも最高の蓮華であ
り、この白蓮華こそ、念仏者の相であると云う。よつて、

善導大師は、この念仏者を「人中好人、人中妙好人、人中
希有人、人中最勝人」とも述べられている。

私共は、ここに「妙好人」なる語の本来の義を知るので
あるが、以後、この本義に沿つて、法然上人は『選択集』
に「言_ニ人中妙好人_一者、是_ニ麤惡_ニ而所_レ稱_{スル}也」（讚歎念仏章）
と述べられ、親鸞聖人は、殊に、その『正信偈』の中で
「一切善惡_ヲ凡_レ夫人、聞_ニ信_{スレバ}、如來弘誓願_ヲ、仏言_ニ広大勝解者_一、
是人名_ニ三分陀利華_一」とこの念仏者を讃えられている。

更に、又、覚如はその著『改邪鈔』の中で「つねの御持
言には、われはこれ賀古の教信沙彌の定なり」と記してい
て、親鸞聖人が自らの念仏者としての生き方を教信沙彌の
上にみられていたことが分る。『日本往生極楽記』によれ

ば、この播磨国賀古郡賀古駅の辺に住む沙弥教信は、妻子を持ちその労働を得て、その日暮しをすると云うその在家の業縁の中にありながら、生涯、称名を絶やさなかったと云われているが、このような生活こそ、後世の所謂、妙好人を刻印づけるものがあるように思われる。

次いで、挙げたいのは、仰誓ゴウセキの『妙好人伝』であるが、妙好人が真宗の篤い念仏者と同義語になる事情と今日の如き妙好人の特性を印象づけたのは、まさに、この「伝」によるとところ多大なるものがあると思われる。

この『妙好人伝』は、最初、真宗本願寺派の学僧であった石見国（島根県）の実成院仰誓（一七二一—一九四）によって書かれ、これに啓発されて、次いで、彼の弟子であった美濃の僧純（二七九一—一八七二）によりその第二篇から第五篇まで、それぞれ上下二巻づつ計八巻が次次に刊行されている。其後、又、松前（北海道）の僧、象王により、安政六年、上下二巻が刊行されている。その仰誓の『妙好人伝』の誓鑑筆の序文をみるにそこには、「石見なる浄泉寺の先師実成院其真実信心の人おほかる中にも殊にすぐれて世の人の範となるべき跡しあれば聞くままに記し見るままに集めて妙好人伝となづけられしは……」と書かれていて、この「伝」に記された人々は、世にぬきんでて人の模範たる

べき人々であることが述べられている。然も、実際にこの「伝」にみるように、その妙好人としての傑出性の強調は、この『伝』以後、尋常一樣ならざる妙好人の例外性を印象づけ、又、無知無学の庶民にこそ、所謂、妙好人を特徴づけようとするのがみられる。

そして、明治以後も、このような妙好人の伝記は、「庄松ありのままの記」等次々と刊行されたが、殊に、藤秀瑛著『大乘相應の地』（昭和十八年）下巻の末尾には、「妙好人才市の歌」が掲載されている。続いて昭和二十一年には、同著者の『新撰妙好人列伝』（『純情の人々』）が刊行されている。この『伝』の大部分は徳川期に属する人々であるが、ここには自力宗系の人々、他力門系の人々を問わず、その純情をもって生涯を美しく生き抜いて亡くなっていった人々を取り上げられている。次いで、鈴木大拙は、つとに「仏教生活と受動性」（昭和八年）、「禪と念仏の心理学的基礎」（昭和十二年）、「浄土系思想論」（昭和十七年）、「宗教経験の事実」（昭和十八年）、「日本の靈性」（昭和十九年）等々、浄土門系仏教に関わる研究を公にしたが、『宗教経験の事実』にみられる讃岐の庄松に続いて、『妙好人』（昭和二十三年）の中では、殊に、才市の研究に終始されている。庄松の臨機応変に、端的に相手をついていくと云う謂わば、

禅機の如き鋭さに対して、才市には感謝とその喜びと云う、謂わば、智より悲の面にまさる念仏者の受動性を淡淡と詩に書いていくと云うところがある。然も、この才市にみられる「他力には自力も他力もなし。ただ一面の他力なり。なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」と云う如き、お念仏の徳をその身に現している人の上に、大拙先生は南無阿弥陀仏の真実義に徹底せる者の相を読み取られたのである。そして、このような先生の研究によって、妙好人は、一躍、公やけに広く紹介されることになったと云ってよい。

以上、粗筋ではあるが、妙好人の本来の義と何時しか妙好人に添加されてきた印象、及び、これまでの妙好人についての研究の経過について若干、述べてきた。然し、私は妙好人の考察については、既に指摘されてきたような様々の視点、例えば、妙好人の歴史的、社会的背景云々等と云うような論議にはとらわれず、以下その本来の意味での妙好人としてのお念仏の生活そのものに眼を向け、お念仏の真実義に値いたいと思うことである。その意味で、私は当論にはその長年にわたる求道の生涯を通して、仏法者でもなければ、念仏者でも、又、妙好人でもない、そのような格好のよいものは何もないと、最後までその煩惱を手放さなかった木村無相さんについて、その大意にたがうなき

ことを念じつつ、以下述べていきたい。

—

木村無相さんの『念仏詩抄』に

和上とおおせに

信ずるとは

仰せを 信ずることじゃ

聞いた心が 仏法ではない

仰せが仏法とは このことじゃ

聞いた心に 腰かけて

仰せたのまで わが機をたのむ

そうじゃなからう そうじゃなからう

ナムアミダブツ ナムアミダブツ

と云う句がある。

右の一句は、その在世中に出された『念仏詩抄』の中の句であるが、その晩年を武生の和上苑で過ごされ、その果てなき生涯の旅路を、ここで終えられた無相さんは、この地にあっても、多くの人々と聞法の御縁を深められた。無相師と呼ばれるよりも、寧ろ、無相さんと呼ばれたのは、その心根の真摯さと親しさによるものである。この『念仏

『詩抄』は、日々折々の思いを、又、手紙を書くにつけても記された一句、一句が集められて『念仏詩抄』になったとも聞いているが、無相さんは、その後、この『詩抄』を繰り返し味いなおされていたようで、称名念仏の一道に聞法の日送りをされる心のうちが垣間^{カイマ}みられることである。

この『詩抄』には、その句作された年月のさだかでないものが多いが、然し、読む人々をして、その親しさの中にも、自然に、敵しく人を惹きつける印象が与えられるのは、思うに、本音で生きようとするその無相さんの姿勢によるものであろう。殊に、これらの秀句の中にあつて深い関心をひくものは、この『詩抄』の末尾に左記のようにある

「念仏詩抄の最後には、敬信老人（伊賀三左衛門）のお歌をいただいて、

敬信老人七十四歳
はずかしや

筆にあらわす領解文
カリ・ニセ・ウソの

ところのみにて”

念仏詩抄

カリ・ニセ・ウソ——

としたことではありますが、今あとがきを書くにあたって、一層、その感を深うすることであります。”

という一文である。この『詩抄』末尾の文章にも、は、らいの一事をどこまでも放さない無相さんの透徹せるその生きざまが、よく示唆されているように思われる。以下、その生涯を追いながら、無相さんの通るに、なかなか通れなかった、その苦悩の内実を、幾分でも、表現することが出来ればと思う。

無相さんには次のような私宛への書簡がある。

大正十三年、私が満二十歳の時、或^{イッセイ}ことが機縁になつて、それまで外に向いていた眼が、一斉に自分の心に向けられ、我が身の煩惱無尽に気づかされて、ああ、この煩惱を今生で断じて、悟りを開きたい、と思った、いや、後から思うと思ひ立たしめられたこととございます。もとより、真宗の、仏教の家庭でなくて、父母に連れられて、日露戦争後の朝鮮、中国東北部で育ちました私には、本当の意味での煩惱とか悟りといったことについては、全く分らぬ私でありましたが。然し、その思い立ちの一念が、現在、満七十四歳の今日まで、五十四年間、続いてきたのでございます。仏教や真宗の教義を聞いてからの思い立ちではなく、ただ『歎異抄』の末文だけ、大正

十年の工業学校の入学当時の満十七歳から、その本文だけを悲しいにつけ、悩ましいにつけて、拝読、音読申さしていただいていただけのことでございますが。

昭和四年から八年まで、満二十五歳から、二十九歳までの四年間のフィリップ・ダバオでの暗中模索の時のあげくに、「仏法の中に救いがあるらしい」という見当だけで、昭和八年、二十九歳で日本に帰り、四国遍路に出ました。どこへ行ったらよいか分らんので、たまたま遍路中に、松山市で真言の堂守をしていたお方から、愛媛県の第六十一番札所の真言の道場、香園寺にお世話頂いたのが、私が仏教のお寺に行った最初でした。

又、真宗のお寺に行ったのは、真言の寺で、学園で、真言の初歩的なことを学ばして頂いた後で、真言をお暇イットマして、昭和十一年、徳島県のお西のお寺をお訪ねしたのが初めてです。三十二歳の時で、皆さん方からみると大変、遅いのであります。昭和八年から、昭和三十三年の最後に、真言から離れるまでの二十五五年間に、結局、真言と真宗を三往復して、その間に、高野山に二度のぼり、又、真宗では、お西の松原致遠先生のお寺で、マル二年間、本願念仏の御縁に会アわせて頂き、又、お東の滋賀県源通寺の禿義峰老院に、マル十六年程、御縁に会アい、

香樹院師、禿顯誠和上の御本をその間拝読し、金子大栄先生には、昭和二十四年から、御往生の一昨年、昭和五十一年まで、御本で、又、直接に二十七年間、お育てを頂きました。

昭和八年から三十三年までの二十五五年間は、顧みて、何と言っても、真言時代と云ってよく、〃今生で煩惱を断じて、今生で悟サトを開きたかったのである〃と云わねばならぬと思うのであります。いよいよ、今生で煩惱を断ずることは、我執我愛の根深い私には、到底不可能なことで、いやでも、「衆生の開覚」「未來往生」の真宗の御縁に、専心、会アわなければならなくなったのは、最後に、高野山の道場を去って下山した昭和三十三年七月、丁度、マル、二十年前、私の五十四歳の時からであります。

以上、ここに無相さんの書簡をながく引きその生涯のおよそをうかがったのであるが、満二十歳の時に、或ることが機縁となり、外に向けられていた眼が、一斉に自分の内に向けられ、我が身の煩惱無尽に気づかされてと云うくだりは、そのまま無相さん自身の求道の動機を示唆するものとも考えられる。後に、無相さんは、或る師への書簡の中で「私の求道の動機は、全く、私の家庭生活から生れたものでありまして、私の両親の業苦の生涯を外にして、私

の求道の動機を語ることは出来ないのであります」と述べているが、家を顧みることもなく、一家離散の状態にまで追いこまれた無相さんにとっては、子供心にも、その淋しさにつけ、悲しさにつけ、父母はその憎悪の対象となつたであろう。然しながら、父母の業苦の生涯も、私自身のためであつたと、氣付かされたところに、その求道への思い立ちが始つたと云つてよい。

その若き日に、無相さんは、一人、父母の下を去つた、その苦悩を「父よ母よ、背きかくれし悪しき子も、人生は悲し、泣けず悲しき」という一句によせているが、後年に至るまで、父母への思いは断つことが出来ず、いや、それどころか、一層、つのるものがあつたに違いない。後年、無相さんは、そのことを「父母子、皆、それぞれの業報に、人生の難度海に没しましたが、御廻向の如来法蔵のお念仏さまは、それぞれの一人一人が、その後姿に、還相教化の仁者であられることをお聞かせ下さることで、凡情止み難く、父を思い、母を思い、姉を思うにつけて、涙と共に、権化の仁としての後姿に念仏申さるることであります」とも述べているが、又、「父母、そのお二人の一生涯の後姿は、無信仰のまま、私を浄土に迎えんがため、還來穢国のお浄土より、お迎えの菩薩であられました。……釈迦、

弥陀と両親には、七十六歳の今にして、*「慈悲の父母」*を感ぜずにはおれぬことであります」とも述べられている。自らも屢々申されていた「釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり」という和讃こそ、無相さんの胸の思いをそのままに伝えるものではなかつたらうか。

次いで挙げねばならぬものに、山頭火との出違ひがある。共に俳誌『層雲』の同人であつた無相さんは、山頭火の作風と共に、山頭火を親とも慕つていた。行乞、作句、酒にその生涯を送つた山頭火であるが、その山頭火の上に、又、酔いどれの煩惱につまされた父の面影をみたのであろうか。無相さんには、既に『光友』に於て、自ら「うしろ姿のしぐれてゆくか——山頭火を思う——」という表題で、山翁（山頭火）について書かれたものがある。その中には、山翁の心のひだにも分け入つて「はつきり見えて水底の秋」、「すなほに咲いて白い花なり」、「捨てきれない荷物の重さ、まえうしろ」等、山翁のその他の諸句作にも説き及んでいるが、自らは、山翁の絶命のお姿をしのんで、「深夜、ただ独りで逝かれしことか」という一句を詠んでいる。殊に、山翁を四国の小松の香園寺に迎えた時の喜びようは、なお、ひとしおのものがあつたようである。その迎えのためのあ

わただしさも記されているが、その一日、山翁と共に、その裏山の横峰寺に拜登の折のこと、無相さんは、山翁に雑草の名を尋ねられたが、山翁のように「句作の志のない私には、野の雑草のことよりも、私自身の内面にはびこってやまぬ煩悩、雑草のことではいっばいであつた」と述べている。このように、その後の道は、山翁と同一ではないが、その作風を、私は無相さんの『念仏詩抄』に感ずることである。山翁の「生きてゐる間は、できるだけ感情を偽らずに生きたい」という念願は、これまた、「本音をはいて、本音をはいて、本音をはいて、自分自身の本音を生きろ」『念仏詩抄』と記された無相さんと相通するものがある。

次いで、真言と念仏の間を、三度、往復した無相さんにとって、この二十五年間は、ともかくも、真剣な苦悩に満ちた求道の時期でもあつた。自ら御縁にあつたお念仏を確めるために高野の山へということも出来ようが、そこには本願念仏の一道に深く心をよせながらも、真言の行実への思いのふつ切れないものが残つたようである。松原致遠先生のお寺で二年間のお育てを受けたことは先述の通りであるが、ここでも未だ南無阿弥陀仏の名号が煩悩に苦しむ身を助けて下さるという味が分らず、やがて、再び高野の山へのぼることになる。高野山大学に勤務すること四年間、

そのかたわら、密教学を聴講するが、ここでも未だ迷いは解けず、遂に下山して、昭和二十五年頃には、香川県も諸処に宿り、岩倉も再訪し、又、安楽寺にも宿る。このようにして再び、浄土の教を聞き、改めて聞法にいそしむことになるが、この間、二十六年六月八日には、次のような書簡が滋賀県源通寺の禿義誠師宛に出されている。

妙改尼と松原先生のお話は、義峰老師様から、親しくお聞きして、誠に味い深く感銘されたことでありましたので、繰り返し拝読しております。

「香樹院曰く、香樹院曰く」と二言めには申されし、松原先生の御声が耳の底にまで、マザマザと残っておるところであります。妙改尼の「わたしは、おっしゃる通り、四十年間、お育てを蒙りました。四十年の間、聞くには聞きましかつたけれど、なんにも聞きませなんだ」とのこと。「なんにも聞きませなんだ」のお言葉。とても私共のうかがえる境地ではありません。

それについて、懐しく思われますのは、播州の大林平衛同行の御縁。平衛同行、無我によるこび居るを、他の同行なじりて「貴方は、ただ如来のお助けが有難いとばかり云っているが、それでは、たのむ一念がぬけて不足ではないか」と云えば、平兵衛曰く、「私はたのむすべも

知りませぬ愚かもの。たのまねばならぬことなれば、如来様より、よきようにして下さることでございましょう。このように愚かなものを御助けとは、ありがたあ」と云いて落涙せりと。

それに類した御縁は、多々あれど、「私はたのむすべも知りませぬ愚かもの」といふこと、誠に誠に有難く存ぜられます。誠にたのむすべも、信ずるすべも、まかせるすべも。知らぬ愚か者であるのに、そのことを気付かずに、ひとかど、もの知り顔に……、たのまね愚かもの私に「たのむすべも知らぬ愚かもの」とは、大鉄槌でございませぬ。

妙改尼は「四十年、聞きは聞いたが、所詮、何にも聞かなんだ」と申され、平兵衛様は「たのむすべも知らぬ愚かもの」と仰せられる。ただ仰せられるのみではなく、そのような身に於て「このような愚かなものを御助けとは」と喜ばれた。

聞く耳もなく、たのむすべも、万劫知らぬものに云うことを、妙改尼様や平兵衛様がお知らせ下さって、この我慢、橋慢の姿をみせて下さる、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、……

たのめとあるも、すがれとあるも、称えよ〜とあるも、

みな助くる〜の仰せなり(香樹院師)とか。仰せ一つ、お念仏一つ。南無阿弥陀仏……

讃岐 勝福寺様にて、

然し、この時期は、お念仏の仰せに聞きながらも、他方では、元の木阿弥を実感せざるを得ない、苦悩と喜びのこともなる時もあった。同じく禿義峰師、義誠師宛の他の書簡には次のような言葉がみえる。

……とかく、御無沙汰して、三年の間、日増しに仏法に遠ざかり、ここ三年間に「闡提」ということをしたたかに、味わされたことでございます。

「闡提」とは「断善根」又「信不具足」と聞くことであります。若存若亡「若存若亡」それも、ますます「若亡」にて、「断善根」お話にならぬ心情にて、「生ける屍」と云った生活で、「闡提」とは、又、一応、仏道に在りし者が、仏法も左程でないで遠去かってゆくその人である」と云う如くに、果ては「念仏誹謗」を致すまでに荒れすぎ、悲しきかなも「恥づべし、傷むべし」も無き、虚無的な愛欲名利に沈没迷惑して救い無き状態で、全く出離なき絶望、絶望にも絶望して、アドルム百錠を持つつも、自殺も決行し得ぬ苦しさ、大苦惱で、ここ三年

を過ごして参りました。全く何とお便り申してよいかも分らぬ状態にて、ただ一人、悶々と大苦惱、生きながらの無間の地獄の生活をしておりました。省みまして、当時の状態は「念仏誹謗の有情は、阿鼻地獄に墮在して、八万劫中大苦惱、ひまなくうくとぞとぎたまふ、」の御和讃通りの大苦惱でございました。

ところが、「念仏誹謗」の其の間にも、意識の底では、苦惱に堪えずして、苦しい時の神だのみ、思わず念仏申さるることでありましたが、長くその中での念仏の何たるやも気付かずにおりましたところ、計らずも一日、このような無慚無愧、一物なき身に於て、なお、お念仏のあることに愕然、気付かしめられて、思わず感涙、お念仏申されしことでありましたが、其後、松原致遠先生の『自然法爾』の御著の中の次の言葉が、しみじみと思ひあたらされたことであります。「不果遂者は果し遂げしめずば止まぬと云う誓願である。自力の心を以て念仏するほかに、念仏のしよを知らぬ愚悪の凡夫である。往生と云う結果を考えねば念仏せぬ、強く恐ろしい自力の心しかもたぬ凡夫である。この凡夫をして念仏せしめ、念仏せしめつつ、遂にその念仏の功德によって、その恐ろしく強い自力の心を、碎かんと誓願したまうが、不果

遂者の願である」と。

御縁あって念仏する人々は、自然に相続する。この相続の間に、念仏は念仏の自受用を發揮し、自然に光を放ち、称うる人に、又、これを聞く人にも、みずからを見る智慧を与える。ここに、みずからの迷える姿が、自然に見出されて来るのである。やがて、無辺生死の海がみずからの内に展開する。「生死の苦海ほとりなし、ひさしくしづめるわれら」と云う感が深まる。ここに、この生死海のありたけを尽くして、救わずんば止まざる本願招喚の声を南無阿弥陀仏と聞くのである。

まことに法蔵の願心は、念仏誹謗の私にあつても、なお、念仏相続せしめたもうて、自受用の願力をもって、大悲智慧の念仏と知らしめたもうてでありました。

大千世界に満てらん火の如き、此の迷倒の火原の「ムネ」三寸の火炎の中を、かいくぐって、血みどろのお念仏としてその姿をあらわしたもう、名告りたもうたものは、求むる心も力も無き、私を知りぬき給うての如来法蔵様でありました。まことにくく色もなければ形もない選択本願の無量寿仏とは、口に入りの南無阿弥陀仏様でありました。『求法用心集』のお言葉の「子を負うて子を探すごとく、提灯をつけてすり火を探すが如し。念仏

称えながら、信心を探し、機法一体成就の名號の由れを聞きながら領解を求める」が、シミジミと頂かれることであります。

アリティに申しまして、真宗、其他の仏教書千冊程を、全部三年前に手放しまして、何一つ手許になく、此の度、知るべをたどって、『求法用心集』もお借りして来て拜読させて頂いておる次第で、まことに／＼お恥かしい次第であります……」(傍点筆者)と此の文章はつづく。

以上、大事な一文であるので、長文ながら、ここに引用させて頂いたが、この書簡の言葉にも窺えるように、ここには、仏法者にも、念仏者にも非ずという悲歎の中に、お念仏の一語、一語に通ってゆかれるその真摯な姿がある。

然も、無相さんは、此の年(三十一年)の夏、再び高野の山へ上り、「真別処」の道場に身を置いている。この「真別処」では、納所の仕事をされ、道場の管理等の役をされていたようである。そして、この間に、ここで記されたものは、二、三あるが、その一つに「撰取して捨てず」(『高野山時報』4号)という次の一文がある。

この「撰取して捨てず」とは、智燈阿闍梨の『大師遊方記』に記された『大師七誓願』の中の言葉であるが、この「撰取不捨」について

此のお言葉に照らされます時、身真言の道場に在って、何と云う恥かしき心根かと思われることであります。

朝夕尊前に拝跪しつつも、これを生身の大師と仰ぐこと甚だ稀れに、朝夕祖教に親しみつつも、これを直きの言音と聞くこと甚だ難いのであります。

されば、こうした我等は、お大師さまの「撰取不捨の誓願」に漏れることでありましようか。又、此の誓願は「真相の想いに住ず者は救い、然らざる者は救わず」とする、取捨さびしき誓願であるのでありましようか。否、否、然らず、と私は私自身のいさかの身証において、これを強く叫ばざるを得ないのであります。(傍線筆者)

「撰取不捨」とは「オサメ、タスケ、スクフ」と聞くことであります。又、「撰取トイフハ、ニグルモノヲトラヘオキタマウ」とも聞くことであります。されば、いかように、お大師さまは我等を撰取して捨て給わぬことでありましようか……と。

このように、その「撰取不捨」の信味については、浄土和讃の左訓と讃岐の国の庄松の譬によって語られている。

本来、「大師七誓願」のこの言葉は、あくまで、自力で三密の加持修法をなすことによって、その撰取不捨の力を頂き得ることを云うのであるが、無相さんには、この言葉の

中に称名念仏の教を読みとろうという気持が、動いていたと思われる。この点は、又、識者にゆだねなければならぬところであるが。

それから、この時期に挙げられるものに、

真夜覚めて——高野山にて——

雪しずる

真夜覚めて読む

『大涅槃』

という一句が、『念仏詩抄』にあるが、三十三年四月に金子大榮先生の『大涅槃』を入手出来た時の喜びとその感懐が、この一句に凝集しているようである。

同三十三年七月(五四歳)、無相さんは、思い出多き高野の山に最後の別れを告げ、下山したのであるが、この下山の直後に於ける身心の疲労は相当なもので、遂に、病に伏したその様子が伝えられている。思えば、二十九歳で仏門に入ってから、二十五年の歳月が流れていたのであった。然も、この間、先述の如く、真言と真宗との間を往復すること三度、無相さんは、その間のことを振り返って、次のように云われている。

「往生極楽、生死出離、転迷開悟、成仏と云うことは、我々凡愚の力ではどうあっても不可能であるのに、念仏

往生の誓願に、お念仏に、自分の生死出離の全体を、まゐるまる、おまかせすることが出来なくて、何とかして自分の力で、凡夫の力を頼みにして助かろうとすることが止まないのでした。何と云うし、ぶ、とい、自力心でありましようか」と。

思うに「念仏一つ」ということは、無相さんが、若くして、既に『歎異抄』を手にした時からであるが、そうは云つても、理想と現実とは異なる。それ故、究極的に「念仏一つ」ということが身に落ち着くまでには、様々の行程があるわけである。無相さんの『念仏詩抄』に「定散自力の称名は 果遂のちかいに帰してこそ おしえざれども自然に 真如の門に転入する」 自力の念仏 そのまんま 他力とわかる ときがくる 自力ぢや念仏 もうされぬ 信前信後 みな他力 念仏そのまま 純他力 ナンマンダブツ ナンマンダブツ」という一句があるが、このことはサッサと煩惱を放り出すことも出来ず、いい加減なところでは難くなってしまうことも出来ない、一歩も半歩も離れようとして離れられないは、からい、煩惱を最後の最後まで手放さなかった無相さんのお念仏の、実際を、その特徴を示している。煩惱そのものなるが故のお念仏の、仰せ、一つである。更に云えば、「果遂の誓」に願われた念仏の身なるを、

求道六十年、身をもって聞き開かれたところに、私はこの有縁の知識のご苦勞を深く思うことである。

二

次に、私は無相さんが御法談、書簡等の中で、屢々語られた親鸞聖人の御著作及び諸語録の中より、その一、二を取り上げて上述の一応の結びとしていきたい。最初に挙げたいものは『未燈鈔』であるが、この『未燈鈔』は関東での異義、別解に対して、宗祖が書簡をもって語られたものであり、従って「他力」の要旨についても懇切に語られている。然も、この「他力」についてみる時この『未燈鈔』の各通を通して語られるものは、「他力とは……」という定義ではなく、行者のはからいに非ずという切実な事実であった。仏教の教を切実に自身のこととして聞いていく者にとっては、「他力」とはこのわが身に否応なく言い当てられてくる事実であろう。「義なきを義とす」とは、はからひなくして如来の御はからひにたのみまいらすと云うことであるが、仰せのままに南無阿弥仏と申すことが、はからひがないということであるとも無相さんは述べている。然も、このような事実は自らがはからひの心をもて生死出離に間に合わせようとするそのアヤマリの如何に止むこと

なきかを知らしめられるところにある。以下、『未燈鈔』についての無相さんの所説を聞いてゆくことにする。

『未燈鈔』第二通中の「わがはからひのころをもて、身口意のみだれごろをつくり、めでたうしなして浄土へ往生せむとおもふを自力と申なり」の聖人のお言葉を受けて、間に合いそうな心を役立てて助からんとするアヤマリについて申し上げましたが、同じく第二通中に「自力の御はからひにては真実の報土へむまるべからざるなり」と自力のはからひについて、おさとし下さっています。第二通の前記では、身口意の三業の何かを間に合わせようとするのを自力と云うように、おさとしありましたが、『一念多念文意』にも「自力といふは、わがみをたのみ、わがころをたのむ、わがちからを上げみ、わがさまさまの善根をたのむひとなり」とあります。凡夫ごころにおこる有難いとか、わかったとかいう心を間に合わせようとするのは、「わがころをたのむ」ということであるから、「すぐに捨ててしまえ」というのでしよう。聖人様は、実によく、自力のはからひではいかぬということをお仰言ってますが、実際には、それがなかなか止まないところに、聞法上の悩みがあることであります。

『末燈』第五通の「自然法爾」の事では「弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひてむかへんと、はからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞとぎきてさふらふ……」と仰せられ、以下、第九通(略)第十通(略)、第十三通(略)第十九通(略)に於て、聖人様が、はからうな、はからうなと繰り返しおざとしあるのは、凡夫の往生は、まるまる如来の御はからひのみにて充分であるからでありましょうが、それがなかなか止まぬことにて、手を変え、品を変えて、はからうて、御廻向のお念仏は、なかなか頂かず、「ききわけ、しりわくる」ことにのみ、力をつくすこととございます。ただ、この誓いありしと聞いて、南無阿弥陀仏に値いまいらすだけでありましように。

「弥陀の名號となえつゝ、信心まことにうるひとは……」と云うことも、ただ念仏往生の誓願ありと聞き、南無阿弥陀仏に値いまいらする という一事でありましように。信心、安心の實際は、凡夫のはからひが止まぬために、大変難しいこととございますが、それなら、ここをどう通らせて頂くかということが、理屈でなく、実地の大問

題と存じます。どうしても「よき人」「善友」に遇わせて頂かなければならぬことと存じます。「幸に有縁の知識に依らずば、争でか易行の一門に入ることを得んや」と、そのよき人として、聖人様を頂くことは、まことにまことに幸せと、私は聖人様の書かれたものにかじりついて、繰り返し、繰り返し、つまみぐいですが、拝読させて頂いていることであります。

以上、その書簡より長文を引用したが、無相さんが『末燈鈔』により証されたものは、凡夫の心の上に本願を疑ったり、信じたり、分ったり、分らなくなったり、そのようなことは、幾らしても何の足しにもならぬし、少しもたよりにはない。「往生は何事も何事も凡夫のはからひならず」(同第七通)ということであった。それは、又、「如来の御ちかひにまかせまひらされたればこそ、他力にてはさふらへ」(同上)と申さずにはおれないことであった。然も、同第十二通には「弥陀の本願とまふすは、名號をとなへんものをば極楽へむかへんとちかはせたまひたるをふかく信じて、となふるがめでたきことにて候なり」とあり、又、浄土高僧和讃に「縦令一生造惡の 衆生引接のためにとて 称我名字と願しつゝ 若不生者とちかひけり」と讃ぜられている如く、「称名を本願とちかひたまえる」(『唯信

鈔文意』口称の本願こそが、弥陀大悲のきわまりであることが述べられている。

無相さんは、その晩年、御法談の中で、屢々、譬をもつて語られた。次の問答は香樹院語録によるものである。「江州長浜のさだ女、香樹院講師に随ひ、聞いても聞いても疑が晴れず、加賀まで随ひ行きしが、師いわく、雪も降り、寒くもなるゆゑもう帰れと。さだ女いはく、私はどうも信ぜられませぬ、疑が晴れませぬ、聞こえませぬが如何致しませぬと。師いはく、そのまま称えるばかりで御助け、其外に何もいらぬぞ」と。さだ女は、長い間、香樹院について聞いていたのでしょう。だが、「念仏申せ、念仏申せ」と、何度、云われても、シツクリこない。ここに香樹院は信ぜられぬのは、疑が晴れぬのは、聞こえぬのはいかんなどとは云わないで、そのままと云って、疑が晴れねば晴れぬまま、聞こえねば聞こえぬまま、称えるばかりでお助けと、ここに無相さんは念仏往生の道が端的に述べられているのをみられている。

お念仏の内実をなすものは、「帰命」の釈にもあるように「西岸上有レ人喚言、汝一心正念直来、我能護汝、衆不レ畏墮、於水火之難」という本願招喚の勅命に他な

らない。その「直来」とは、私の心がどうあろうとも、私の心の作用に一切関係なしに、そのままに來れの意であつて、それは、又、「ただ念仏して」(『歎異抄』第二条)の「ただ」の謂に他ならない。此の論の最初に記したように、『念仏詩抄』の「仰せが仏法なり……」の一句は、まさに、この「ただ念仏して」の一語に聞かれたものであるう。又、よく云われた「オーム念仏」ということも、この「ただ念仏して」の言葉を体したものである。念仏一つの出立より「ただ念仏して」の一道に帰入された無相さんの最後の言葉は、「煩惱のおかげで願に値い得たり、煩惱さまよ、念仏さまよ」であつた。

以上、所謂、妙好人ならぬ妙好人、念仏の人として無相さんを取り上げたのであるが、今度の此の論への思い立ちには、私にとって容易に踏みきれるものではなかつた、この論を書くにいたつたのは、敢て自らをも省みず、この有縁の知識のたどりし念仏の一道に値いたいという一念に駆られてのことである。無相師の念仏の生活の一語一語については、先述の資料を典拠として、更に、続いて稿を改めたいと思う。ここに御叱正、御教示を心よりお願いしたい。